

地域資源を守る

2

地場産業の継承



加茂 詞朗
KAMO Shiro

タケフナイフビレッジ協同組合
副理事長



伝統産業が抱える問題に直面しながら、越前打刃物の継承と振興を目指して立ち上がったタケフナイフビレッジ。現代デザインと融合させながら、刃物職人として伝統的かつ洗練された製品づくりに徹する人々の思いによって、今日の打刃物の産地は守られている。

越前打刃物の始まり

福井県越前市は律令時代(7世紀中頃～10世紀頃)に越前の国府となり、国分寺が置かれて多くの工人(労働者)や帰化人が来たことで、産業の礎が築かれた古い土地です。継体天皇の伝説があり、紫式部も父が国司として赴任した際に1年間滞在し、歌も残しました。残念ながら田舎暮らしに慣れず、雪の多さに辟易して都に帰ったそうですが。

近辺の丹南地域には、他に和紙、漆器、陶器の産地があり、小さな地域に伝統産業が集中しています。諸説がありますが、元々は国分寺の建立や修復に従事した工人がこの地で技術を磨き、継承されて来た賜物ではないかと言われています。

越前打刃物もそういった流れや、戦国時代に連れて来られた鍛冶師が定住したことに由来しているのではないとも言われています。通説では、1331年に京都の栗田口から来た刀鍛冶の千代鶴国安が刀を打つ傍ら、農民のために鎌を打ったのが、その起源とされています。その頃の鎌は今と違って刃の反った包丁の様な形であったようで、それを今のような三日月型に改良し、農作業の効率が上がったとのことです。

江戸時代になると、福井藩の家老として本多富正公がこの地に2万石で封ぜられました。地域産業として鍛冶を奨励して株仲間を組織し、保護と管理によって最盛時には

150軒の鍛冶屋が居たそうです。漆器産地を支えた漆かきの人達が依頼のあった鎌を背負って山間の村に行き、鎌を売ってお金にし、帰りに漆を持って帰る。後に専門の行商人が出て来て、日本全国に広めて行ったそうです。

武生刃物工業研究会の立ち上げ

戦前の越前市は日本でも一番の鎌製産地でしたが、戦後は消費地からも遠く、他産地が近代化を図る中、昔ながらの技法を受け継いだままの産地が残って来ました。販売形式も産地間屋から消費地間屋へ、そこから小売店や専門店へという流れもそのままでした。変わったのは時代のニーズに合った物を造ることだけでした。

「このままでは自分達の時代は何かなるが、その後はどうなるのだろう」という気持ちが若い職人から起きてきました。そして、「新しい商品を造って将来に向かおう」と起業したグループがありました。資本が無いので、昭和48年に「武生刃物工業研究会」を



写真1 昔の鍛冶の様子



写真2 古式鍛錬



写真3 川崎氏との打合せ



写真4 試作の山



写真5 「スコラ」で鉛筆を削る子供達

立ち上げました。これは技術の向上と同業者の親睦が目的の組織でした。

当時は鍛冶屋の地域が分かれていたこともあり、今思うと不思議な気もしますが、お互いの交流も盛んではありませんでした。同じ鍛冶仕事でも鎌、両刃包丁、片刃包丁、鉋など、造る内容が違くと全くお互いを知りませんでした。組合組織もあったのですが、個々の仕事に専念している状態でした。そんな中、若手職人の集まりが市営工業試験場を中心に組織されたのです。

当時の若手にも、今の状態を維持したい業者も居れば、新たな取引先を探したい業者も居ます。それぞれの取引状況によって思いが違ったようですが、そこは抑えて、「越前打刃物の振興をどうすれば良いか」を話し合っていました。しかし、なかなか突破口が見つかりませんでした。

あるデザイナーとの出会い

昭和55年、福井出身のデザイナーである川崎和男氏が帰郷され、「福井を活かした商品造りが出来なにか」と工業試験場に来られました。元々はオーディオのデザインに関わっておられ、その時は多くの業者が居た地場産業の木工に対して、家具をどうにか出来ないかと考えられていたようです。その後、試験場の職員の方が刃物を何とか出来ないかと考え、近くの刃物工場に出かけて、研究会メンバーと川崎氏との繋がりを持たせてくれました。川崎氏は研究会の意見を聞き、早速デザインを描き上げて会議に持って来られました。

当初は川崎氏が、聞き慣れない用語を使ってデザインの話をするのが、「内容が良く解らず、その上、品物になりそうに無い」と思ったそうです。なかなか研究会メンバーに受け入れてもらえない中、それでも川崎氏は粘り強く、武生にまで出向き、工場で見たり、福井の言葉で話をしたりと、少しずつ距離を近づける努力をされました。そして、ようやく試

作までこぎ着けることができました。

それまでの包丁の形は、単に平面に描いたもの、「これ位の重さで仕上げたい」という程度のことしか書いてありませんでした。ところが、川崎氏の描いてきたものは数字が入った図面で、角度や丸みの半径まで指定してあります。こんな図面で包丁を造ったことが無かったメンバーは、指定通りに造ることが大変だったとのことです。なぜなら、道具や機械治具作りから始めなければならなかったから

です。試験場にある工作機械の中の古いフライス盤を何とか使ったり、加熱して曲げたりと、今までとは全く違った作業の連続でした。一緒なのは刃を造るのと研ぐことだけでした。試行錯誤を重ねて失敗作の山が出来ました。ある程度の出来では、川崎氏に持って行ってもOKが出なかったからです。毎日夜中の2時頃まで掛かって、何とか彼に一泡吹かせられるような物を造ろうと、必死の思いでした。

また、今もそうですが、学校に刃物を持って行けず、鉛筆も削れない子供が増えているので、安全で削りやすく、子供に持たせられる刃物を造ろうということになりました。早速出されたいくつかの図面から、何丁か試作し、小学校に持って行ってどれが一番削りやすいかを試してもらいました。こうして試行錯誤を積み重ねた結果、出来上がったのが「スコラ」という鉛筆削りです。

東京とニューヨークでの発表会

昭和56年、東京六本木のアクシスギャラリーで、グループの名前も「タケフナイフビレッジ」とし、「越前打刃物物語」と銘打って発表会を開催しました。新製品として開発デザインされた48点と、色々な形の越前打刃物140点程を一堂に展示しました。多くの方々に見て頂けるように招待状も発送しました。

その時、私はまだ東京神田の金物商社に勤めており、初日に見に行きました。六本木も初めてでし



写真6 タケフナイフビレッジ展



写真7 展示会



写真8 工房設計打合せ

たので、東京タワーの見える外国の様な感覚でした。発表会の展示はまだ完全に終わっておらず、名前は知っていたものの、ほとんど会ったことの無い現在のメンバーが居ました。発表会を見て思ったのは「私も帰ったら一緒にやってみよう」との思いでした。とても格好いい包丁が並び、今まで父の仕事を見ていたのとは大違いの景色が広がっている。そんな感じでした。

2年後、今度は越前和紙、越前漆器、若狭漆器を加えて、再びアクシスギャラリーにて発表会を開催しました。最初の発表会を機に、日本全国で伝統産業にデザインを取り込む事例が多くなって来ました。同じように発表会が催され、ブームのようになったようです。

また、最初の発表会では、大手デパートのオーナーが来ていたのを川崎氏が記帳から見つけ、その後、そのデパートの各店で展示会を開催して頂きました。残念ながら大きな商談にはなりませんでしたでしたが、大きな自信に繋がったのです。

私もその後帰郷し、父の仕事を継ぐべく包丁造りに従事することになりました。少し慣れた頃に、研究会に入り一緒に活動するようになりました。

昭和61年にはニューヨークでの発表会が企画され、ソーホー地区のギャラリー91で、約1カ月に渡って開催されました。この時も多くのデザイナーから注目され、大手デザイン会社からのオファーもありました。数量と価格が折り合わなかったため、海外で造ることも検討されましたが、仕上がりは要求に程遠いということで流れてしまいました。

試行錯誤の日々

毎年、何かしらの新商品を考えて試作しました。ハサミや家庭向けの物など、アイデアを出して形にし、川



写真9 完成した工房

崎氏に見せ、それを元にリファインしてデザインスケッチを起こす。持ち帰って再度形にする。何度も行き来し、夜遅くまで会議をして「どれだけ良い形に仕上げられるか」「どうしたら効率良く造れるか」という試行錯誤を繰り返しながら、議論をし合って新しい物を創っていきました。

当然、経済的な負担も考えなければなりません。毎月の会費徴収は勿論、仕事が終わった後に会議をして、さらに試作のための夜なべ仕事をする。そんな日々を、今更ながらに良くやれたと思います。川崎氏も不自由な体の上に、体調が良くない時があっても、私達に心配を掛けずにされていたと聞いています。

本当に良くやれたなと思います。こんな活動に対して、地元の市や県も応援して頂けるようになりました。商品開発や展示会の出展費用を補助して頂いたり、ようやく認めてもらえるようになりました。

共同組合の設立

しかしながら、任意団体のままでは不自由なこともあります。また、メンバーの高齢化が進めば思うように活動出来ない事態も考えられます。しかも、メンバーの半分は町中で工場を持っています。騒音などの問題を抱えていることや今後の活動拠点が必要であることから、「共同の工場を造ろう」という話が出てきました。

工場を造るにしても問題は山積みです。メンバー



写真10 鍛造ナイフ教室



写真11 工房での研磨作業



写真12 タケフナイフビレッジの製品

の最高齢は52歳で、「これから何年働けるのか」「返済が出来るのか」「ただでさえ芳しくない業種なのに、これから先も維持出来るのか」「どのような組織が良いのか」「みんなに還元出来る形態なのか」「本当にこのまま喧嘩などしないでやって行けるのか」「どれだけのお金が必要なのか」などなど。毎日の討論の結果、「今は何とかなっているが、本当に追い込まれたら何も出来ない。多少でも余力のある今やらなければ、手遅れになってしまうだろう」というのが結論でした。

これらを解決するため、今までお世話になった市の職員でもある試験場の方や、県の中小企業団体中央会の方に相談し、どの様な組織形態が良いか検討を重ねました。その結果、全員が平等な形で物造りが出来て、しかも国の補助が受けられる“協同組合”がベストではないかと結論に至り、平成3年10月に「タケフナイフビレッジ共同組合」を設立しました。

共同工場の完成

国の高度化資金を借りるには、計画だけでなく今後の予想も必要です。これは組合員にとって、これからの返済や自分の身の丈に合った計画を進められるという利点もありました。その一方で、県の中小企業団体中央会の方の指導を受けながら、取り揃える機械から工場の規模、土地の取得など、やるべきことは山ほどありました。

工場の設計は川崎氏と繋がりのあった毛綱毅曠氏に頼みました。福井近辺では能登のガラス博物館や門前ファミリーインを設計されている建築家です。実際に見に行き、とても奇抜な感じの建物でしたが、これからの私達にもこれ位パワーのある工場が良いのだろうとも思いました。実際の設計に入ると、面白い建物になりそうでしたが、最終的には資金が不足してしまい、ちょっとパワーダウンしてしまった感もあります。

土地もそれに相応しい場所を求めたのですが、なかなか見つかりませんでした。それでもなんとか、今の土地を提供してもらうことが出来ました。地主の方も元は鍛冶屋さんだったとのことで、譲って頂けたようです。

何とか工場の計画も通り、資金を貸して頂き、平成5年5月に竣工しました。工場の形態は共同工房です。

職人が一つの工房に集まるという形態は全国でも珍しいようです。永年付き合ってきて、試作や展示会などで心が知れているのもあって、その形態は今でも続いています。このような形態にしたのも、一人か二人の仕事では売り上げも知れているのに、必要な機械の購入費用は年間の売上額程もあり、それを1日のうち僅か1時間も使わないのでは無駄が多過ぎるからです。そこで共用の機械を設置して、肝心な部分は各自の道具が使えるようにしました。

伝統と技術を後世に残す

今までの個別の鍛冶工場だと、暗くて埃が多い8畳間程度の場所で、親方と子方が常に顔つき合わせており、それでは後継者育成が難しいという問題もありました。その点共同工房では若い人が入って来ても、親方達がお互いに協力してフォローしあえるだろうという思いもありました。お陰様で、今では10人近くの後継者候補が育って来ています。後継者の少ない伝統工芸産地にとって、大変喜ばしいことです。これまで多くの先輩方から受け継いだ越前打刃物の伝統や技術を後世に残すためにも、時代に合った改良や工夫を積み重ねて、さらに続けて欲しいと思っています。

この後継者達が今後も続けてもらえるように、新たな販売に向けた取り組みもしています。6年前からフランクフルトメッセに出展し、僅かですが輸出もするようになりました。また、鍛冶仕事を実際に体験出来るように、毎年鍛冶教室を開いています。これまで北は青森、南は沖縄からと多くの参加者に来て頂いています。

また、現在、親方と言われている私達も、まだまだこれからさらなる努力を重ね、次の時代に打って出なければならないと思っています。タケフナイフビレッジの活動はまだまだ発展の途中であり、これからはさらなる継承と発展を目指していきます。